

文学 1982

日本文芸家協会編

文学1982

日本文芸家協会編

編纂委員

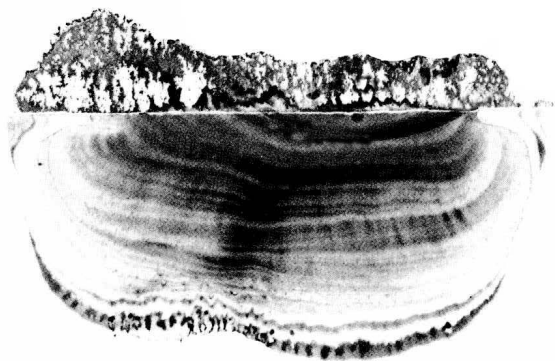
秋山 駿

入江隆則

桶谷秀昭

川村二郎

黒井千次



文学 1982

昭和五十七年四月十六日 第一刷発行

編纂者 日本文芸家協会

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替 東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 一九〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© Nippon Bungeika Kyokai 1982 Printed in Japan

ISBN 4-06-116282-9 (文1)

まえがき

入江隆則

秋山駿、桶谷秀昭、川村二郎、黒井千次の諸氏と私の五人の選考委員が集って、昨年一年間に発表された短篇小説のなかから、できるだけ良質の作品を集めようと試みて、でき上ったのがこの作品集である。全体の原稿の枚数が八百五十枚を越えてはならぬという制約があるので、百枚以上の作品はなるべく少数にするという条件を確認した上で、二時間ばかり議論を続けた。一年間の歴大な作品リストのなかから、最初に各選考委員が推薦した作品を抜き出し、次いで一作ずつ議論を重ねて落して行くという方法である。それを三回くり返したが、なかなか全員の意向がそろうのは難しく、私個人としてはぜひ入れたかった作品のいくつかが外れたが、その点是他の委員も同様だったらしいから、ここに収録されたのは、いわば選考の最大公約数的な結果ということになる。

しかしその十六篇を今ここに並べてみると、たいへんバラエティに富んでいて、その意味では良い選考だったのではないかと思う。新人、中堅、大家がまんべんなく顔を見せているし、全体としてそれほど実り豊かとは言えない年だったわりには、ほぼ珠玉といっている作品ばかりが選ばれている。それぞれ一作一作違った味の作品を、楽しんでもらえそうである。そこで「まえがき」としては、どうぞゆっくり御味読下さいと言っておけば済むわけだが、それではいささか芸がないので、この一年

間の小説界の動向と、ここに収録した作品の特徴などを、スペースの許す限り記しておきたいと思う。

この一年間に限らず、最近数年の顕著な傾向は、なによりもまず、文学界に中心的存在がなくなつたことだろうと思う。戦後文学だけを考へてみても、三十六年前の敗戦直後には第一次戦後派や近代文学派、それに続いて第三の新人、大江健三郎や石原慎太郎らの「怒れる若者たち」、さらにその後には内向の世代等々、小説の世界にはつい十年ほど前までは、中心と言えるものが存在した。良きにつけ悪しきにつけその中心の盛衰が、そのまま小説の歴史だつたと言える。

しかしこの十年間ほどのうちに、そうした中心が影をひそめてしまい、どんな作家も中心的存在であることができないまま、一種の無重力状態が文壇を支配するようになってしまった。新人も次々に現われ、その時々の評判を呼んでも、決定的なバンチは誰も与え得ず、その一方で既成の中堅作家や老作家たちも、ある程度の水準の作品を書き続けている。そのすべてが混沌として共存しているのが、今の文壇の状態ではなからうか。

そのなかであえてこの数年の傾向らしきものを指摘すれば、まず女流作家たちの活躍を挙げねばならないだろう。もともと私は、現代が女流作家の時代だと言つても言うつもりはないが、新人作家たちのなかの女流の割合は、一昔前にくらべて明らかに増えていると思う。作品の質はつねに良いとは限らず、概して問題の追求が中途半端に終っている場合も多いが、多数の女性作家の活躍は、一つの興味深い現象と思う。

本書にも、津島佑子氏の「あの家」、岩橋邦枝氏の「燠火」、増田みず子氏の「独身病」、吉行理恵氏の「小さな貴婦人」の四篇が入っているが、それぞれに傾向の違った異色の組み合わせになつてい

て面白い。たとえば津島氏の「あの家」は、二代続きの母子家庭の話であって、四歳になる子供の母と祖母が、ともに父親のいない変則的な家庭しか作れなかったので、子供たちがすべて、わけのわからない欲求不満におちいる話である。

そこからそもそも「家」というものの本来的なかたちは何かという、根源的な問題が作者の前に現われる。戦後の日本では日本的な「家」の存在が、諸悪の源泉のように言われた時代があったが、津島氏の小説は、逆に父親のいない欠損家庭の姿を描くことで、そうした言説がいかに早トチリであったかも浮き彫りにしているとも言えるだろう。

また岩橋邦枝氏の「燠火」は、中年夫婦の倦怠と危機というかたちで、やはり現今の「家」のありかたを問うていると見ていい。子供が成長しきって育児の世話のなくなった夫婦が、それぞれに外で情事の相手を作り、お互いにその事実に気付きつつも、家庭をこわすまでの勇氣は持てずに、なんとなく情性で生きている。老境を前にしたその索漠さが、女性の視点からよく描けていて、捨て難い味がある。ある意味では、過去からの連続性を失った、現代の核家族のなれの果ての姿であろうか。津島氏や岩橋氏のみならず、女流作家が「家」の問題に焦点をあてるのは、昨今の一つの傾向であって、その成果には期すべきものがありそうだと私は思っている。

もともと女流のすべてが、つねに「家」の問題ばかり書いているというわけではなくて、増田みず子氏の「独身病」の場合は、大学の医学部の医局につとめているハイ・ミスの眼を通した男性社会の様相がつぶさに書かれている。この作者はつねに、ユーモラスで辛辣な視点を持った独身女性を登場させるが、この作品にもそれがうまく生かされている。大学医学部の教授とか助教授といった連中の人間的頼りなさや、派閥抗争、嫉妬などが眺められていて、しかも女主人公がそのなかでかくべつニ

ヒリスティックにもならず、なんとなく婚期を逸してしまうところがうまく描けている。増田氏の作品のとぼけた味わいは、女流としては稀有のもので、この人が将来どんな成長を見せてくれるか、大いに楽しみである。

芥川賞を受賞した吉行理恵氏の幻想小説「小さな貴婦人」については、すでによく知られているはずだから、その超日常的なメルヘン風の味わいが、やはり稀有のものだと言っておこう。

さて、本書に収められた作品群の第二の顕著な特徴は、田久保英夫氏の「百日紅」、上田三四二氏の「月しろ」、黒井千次氏の「石の話」、坂上弘氏の「杞憂夢」、岡松和夫氏の「水上公園」、佐木隆三氏の「むぎ笛」など、いわゆる内向の世代とその周辺、もしくはそれに近い作家たちの作品が多く選ばれ、概してその人々の成熟が感じられる点である。

とりわけ見事なのは田久保英夫氏の場合だろう。田久保氏は昭和三年生まれで、文学的出発は昭和三十年代の始めだから、世代的には第三の新人と、石原慎太郎氏、大江健三郎氏らの中間に位置する作家の一人で、出発は早かったが、作風からいえば、昭和四十年代の後半に出現した内向派とかなり共通するものがあると私は感じている。浅草の料亭での生れからくる、よい意味で古風な感覚と、三田文学系の都会派のセンスが、ともにこの作家のなかには流れている。

「百日紅」はかつてしばらく料亭につとめていて、その後、妻子ある男にかこわれて暮していた、津世という女の自殺が扱われている。この女主人公の独特の魅力は、どうやら生きることに対して徹底的に投げやりになっている点にあるらしく、いくつかのエピソードを積み重ねて、そういう女の姿を彷彿とさせる手腕は、見事という他はない。慎重に言葉が選ばれ、 unnecessary 描写を極力落して、墨絵の技法のように人物が造型される。盛りを過ぎてこの世に望みを失った女の自殺という点では、大岡

昇平氏の名作「花影」を連想させるが、田久保氏の場合は、描写が人物の内面に入るのをつとめて避けており、そこに作者の人間観のある種の諦念、もしくは節度を見ることができるといえる。

上田三四二氏の場合は、大正十二年の生まれであるから、さらに年長ということになるが、歌人もしくは批評家として定名を得た後で、比較的最近小説を書きはじめた人であり、作品の世界は田久保氏とはむしろ異質だが、やはり内向の世代との親近性を感じさせると言っていいたいだろう。上田氏の小説には、よく隠者もしくは世捨て人めいた男が出てきて、その男の眼で眺められた陰翳の世界に独特の風格がある。ここに収めた「月しろ」は、上田氏としては珍らしく正面から、女を描いた短篇で、短い作品ながら、生命をいづくしむのに似たなまなましさがよく掬い取られていると思う。

黒井千次氏と坂上弘氏は、それぞれ昭和七年と昭和十一年の生まれで、昭和四十年代から主要な仕事を始めたという同時代性があり、ともに内向の世代の有力な作家とみなされてきた。黒井氏の「石の話」は、雑誌発表時にひろく批評家の賞賛をあびた作品である。結婚して二十年以上もたつて、ある会社の部長になっている男が、若い頃に買えなかったダイヤの指輪を妻に買ってやろうと思う。しかしその話を妻にすると、妻は、同じ、石、なら自分専用の墓石を買ってくれと言いついて、彼をぎくりとさせる。彼の家の先祖代々の墓には入りたくないという意志表示だからであり、もつとはつきりいえば死後の離婚を意味するからである。彼の脳裏には、姑との関係で長い間妻を苦しめたことへの、自責の念が浮ぶ。しかしまさかそんなに早急に墓石を買いはしないだろうとたかをくくっている、ある日近くの駅前デパートで墓石の特売を見に行った時、売約済の墓石に彼自身の名前を発見して驚くのである。

黒井氏は当初から、現代の家族のあり方を作品化してきた作家で、その問題はただちに解決が見つ

かるような小さな問題ではないが、この作品を読むと、人物の扱い方にある種の余裕が感じられ、ストーリーの運びにも工夫がこらされている。そこに内向の世代の作家のある成熟のきざしを見ても誤りではないだろう。

坂上弘氏の「杞憂夢」も、この作家の久々のヒットともいふべき好短篇である。怖い小説の例として永井龍男の「一個」の印象を冒頭に置き、天折した作家・山川方夫の思い出や、四十歳をすぎた主人公の見る夢の話につながって、人間の生存のふだんは気づかぬ危うさを垣間見せてくれる。最後に主人公とその父親との会話ができて、父親のわびしい後姿の印象でしめくられる。話らしい話のない小説の典型的な例と言ってよさそうだが、それでいて一気に読ませる力があり、人生を眺める作家のまなざしの優しさを印象づける。

佐木隆三氏の「むぎ笛」と岡松和夫氏の「水上公園」はともに、三十六年前の戦争の記憶を扱った作品で、佐木氏の場合は広島原爆、岡松氏の場合は博多の大空襲の傷跡である。それらの記憶はいまだに生々しいが、しかし同時に三十六年の年月を通して濾過された落ち着きも感じられ、そこに戦後の歩みの、一つの里程標を読みとることもできるだろう。

戦争といえば、三浦朱門氏の「敗戦」も、三十数年前の記憶を再現した小説ということができる。

昭和二十年の八月に日本が敗北して、主人公の若者が軍隊から帰ってきたところから物語が始まる。毛布と二斗の米とイワシのカンヅメを持ち帰ったこと。二週間ばかり寝てすごしたこと。戦争中の東京の中学校の雰囲気意外にリベラルで、中学生たちがかなり辛辣に時局を批判していたこと。

敗戦直後の大学の混乱。米兵のジープに乗って英語で話したこと等々。重厚な筆致で語られていて面白い。

この種の戦後回想小説は、多くの作家がいろいろなかたちで書いてきたが、三浦氏の作品は依然として新鮮な印象を与えずにはおかぬ。こういう混乱の時代は、人間生活の実相が赤裸々に現われる時代だから、青年たちにとっては大いに教育的な効果があったのかもしれない。少くともこの小説を読む限り、そういう一種教養小説風の読後感を持つのである。

ところでこの一、二年の文壇のもう一つの特徴というべきものは、八木義徳、川崎長太郎、島村利正、野口富士男といった、いずれも明治生れで六十歳を越えた人々の旺盛な活動が目立ったことである。この一年だけを見ても、八木氏が五篇、島村氏が五篇、川崎氏も五篇、野口氏が六篇と、そろって力作を発表している。本書にも、島村氏の「青い雉」、八木氏の「漂雲」、野口氏の「狐」、それに、やはり盛んな創作活動を続けている丹羽文雄氏の「春の蟬」が収録されている。

島村氏は長野県の生まれで、若いころ奈良に出て飛鳥園に入社した際、ちょうど奈良に在住していた志賀直哉や滝井孝作の知遇を得た人で、処女長篇「高麗人」が書かれたのは、今から四十三年以前の昭和十五年である。また八木氏の場合は、北海道の生まれで、文学的開眼は室蘭中学時代に読んだ有島武郎とドストエフスキーだったというから、やはり半世紀以上も昔の話である。島村氏と同じく早くも昭和十年代には、左翼運動にたずさわったりしながらも、いくつかの短篇小説を発表している。島村氏が昨年の十一月に亡くなったのは大変残念なことだったが、八木氏や野口氏らがいまだに健在なのはまことに喜ばしい。本書に収められた作品から明らかなように、島村氏の場合も八木氏の場合も、また野口氏の場合も、実に鮮明適格な文章で、若い日の記憶を作品化している。

島村氏の「青い雉」は、信州の実家から久しぶりに送られてきた一羽の雉がきっかけとなって、大正時代に通った小学校にいた鳥居ふじ子という同級生を思い出す話である。ふじ子は小学校四年で信

州から横浜へ出て行くが、主人公の杉村も、同じ頃故郷を離れて奈良へ出奔してしまう。この辺の設定は、たぶん作者の島村氏自身の半生を踏まえたものだろうと思う。主人公はその後小学校の同級生と会う機会はほとんどないが、不思議と鳥居ふじ子とだけは、戦争中の空襲の最中や、戦後故郷で鮎つりをした際などに、偶然の出会いがくり返される。その記憶があざやかに定着されている。また作品の冒頭の部分で、雉を旨く食べるには、撃ってから散弾を丁寧に取り除き、腸をぬいて、四、五日置いてから食べるのがコツだとか、鯉の味噌漬のおいしい作り方だとか、伊那谷名物のお葉漬の食べ方などが記されていて、これもまた貴重な思い出の要素として、読者を楽しませてくれる。

八木氏の「漂雲」も、同様に若いころの記憶が題材だが、さらに生まるましい生命の燃焼の記憶である。主人公は七十歳に手のときそうな老人で、「頭脳の老化」と「記憶力の鈍麻」をかこっているが、三十代の一時期に通いつめ肉の交わりを重ねた女が、ひょっこりと現われる。名前はなかなか思い出せないが、濃密だった関係だけは忘れようもない。それは日本の敗戦直後の混乱の時代である。満州から引揚げてきて行方不明になっていた彼女の姉と弟を、苦勞してさがし出したことなども、昨日のことのように心に浮ぶ。その女との関係が、三十年後の老境の最中に、ふと復活しそうなけはいを見せるところは真に迫っており、老残の情念のなごりを感じさせる。

野口氏の「狐」も、東京の昔の思い出からはじまって、若き日の思想遍歴や、色街で遊んだ記憶などが書かれているが、今生の思い出に、ぜひこれだけは書き残さずにはおかめといった気魄が感じられ、なまなましい味わいを生んでいる。

島村・八木・野口の三氏よりもさらに年長の、明治三十七年生まれの丹羽文雄氏については、くどくだと述べるまでもない。大正十五年の「秋」以来の、半世期を優に越える文筆活動は、数多くの名

作を生み出してきたが、ここに収録した「春の蟬」は、短篇としては出色のもので、いまだに衰えを知らぬ文章の冴えを見せてくれる。三十年前に手に入れた木造家屋がきしみはじめた話題からはじまって、夏に別荘にこもって仕事に専念する話になり、やがて本題の、いささか頭のおかしいお手伝いさんの話になる。ほとんど身辺雑記といった書きぶりだが、たくまざる人間観察に行きつく筆の運びには、長い年輪が感じられると言う他はないだろう。

さてこの作品集のもう一つの収穫は、今年のもっとも有望な新人の一人、宮内勝典氏の「金色の象」が収められたことである。この数年の新人の輩出ぶりはなかなか目覚ましいものがあり、さまざまな特徴を指摘できるが、その一つに国際化現象というべきものがある。十数年前からはじまった海外旅行ブームは、あい変らずの盛況を見せているようだが、たぶんその影響で、文学界も、海外に題材を得た作品が多くなっている。十年近く外国を放浪して帰国して、なにか憑きものが落ちたようになり、やがて小説を書きはじめるという新人作家も増えている。青野聰氏や笹倉明氏などがその例だが、宮内氏も明らかにその一人である。「金色の象」の主人公は、「四年間、アメリカでさまざまな職を転々として暮らし、さらに一年近くかけて地球を一巡りして帰ってきた」男である。

新人の作品のなかに、こういうアチラ種の小説が増えるのを好まない人もいるようだが、私はそうは思わない。日本全体がこれだけ国際社会にとっぷりつかった時代に、文学だけが鎖国状態でいられるはずはない。当然国際小説が出てこなければならぬのである。にもかかわらず、今のところはこの領域で優れた作品が少いのを、むしろ残念に思っている。一つの理由は、外国体験の質の悪さが原因だろう。ヒッピーとしてしか外国を見ていない人に、トータルな日本の国際化の現場が書けるはずもないと思う。

宮内氏の「金色の象」は、そうした現状の中では比較的質のよい作品である。主人公の外国放浪体験がそれほど前面には出ていなくて、帰国してから知り合った女との間に子供が生まれて、その子供が未熟児のまま死ぬ話が、むしろ中心になっている。非常にプリリアントな文体で、読者に訴える力が抜群である。力を秘めた新人と言えるだろう。

さてこうして収録作品を一わたり見渡してみると、最初に述べた通り、それぞれに持ち味がよく出ていてバラエティに富んでいるが、同時に総体としては、じつくりと対象を眺めて、その実質を問うといった、落ち着いた視線が感じられる。しかしあえて僻目で見れば、平和なモラトリアム状態にひたりきった、やや消極的な冒険心の欠如も指摘できるだろう。現代は何かが完成される時代というよりも、やはり一種の過渡期と見た方が当たっているだろう。この過渡期の一時的な平靜さが、小説の私たちとして今後どういう方向に動いて行くのか、見守りたいと思う。

目 次

青い雉	島村利正	7
燠火	岩橋邦枝	18
百日紅	田久保英夫	38
独身病	増田みず子	54
金色の象	宮内勝典	75
小さな貴婦人	吉行理恵	123
むぎ笛	佐木隆三	144
狐	野口富士男	156
石の話	黒井千次	172
あの家	津島佑子	187

月しろ

上田三四二
198

漂雲

八木義徳
207

水上公園

岡松和夫
219

杞憂夢

坂上 弘
240

春の蟬

丹羽文雄
250

敗戦

三浦朱門
267

まえがき

入江隆則

巻末・収録作品時評集

装帧
岩本正雄